

# 日本茶がヨーロッパで流行の予感！ イタリア「ルツカ古典椿祭り」を訪ねて

Coordinate/KAZUO SAKUMA Photo/MARCO PARDINI

イタリア トスカーナ州 ルツカ県コンビトにヨーロッパで唯一の茶園がある。栽培を始めたのはグイド・カトリカ氏。彼は世界一の椿園を経営し、ありとあらゆる種類の椿を収集。かつてベトナム戦争で絶滅した品種も、彼の椿園では可憐な花を咲かせている。

ではなぜ、椿園に「お茶」が登場することになったのか？ お茶は椿科の植物でありグイド氏にと

ってはお茶は、あくまでコレクションの茶園であった。飲み物として収穫することなど思ってもいなかった彼の視線を釘付けにしたのが、ここ数年ヨーロッパのメディアを賑わせている「日本茶は美味しく、健康にも良い嗜好品である」という情報。

興味を抱いたグイド氏は、英国のお茶専門誌である「Tea Inter-national」に、自分の茶園の記事を送ったのだが、それをインターネットで目にしたのが、静岡のお茶組合の谷本宏太郎氏。「是非お茶の育て方、いれ方を指導させて欲しい」という彼の思いが実現し、スタッフ約40名でイタリアを訪れることとなったのである。

去る3月8日から23日、今年で9回目を迎えた「椿祭り」が開催された。樹齢250年以上の椿の大木や、1500年を生き続ける椿の並木、希少価値を誇る品種の椿が訪れた人々の注目を集める。

その一画でお茶の手揉み実演や試飲会が行われたのだが、グイド氏自らも参加してのイベントは、イタリア国内はもちろん、ドイツ、フランス、スイス・オーストリア等から大勢の人々と共に、プレス関係者も詰めかけ、大好評を得たのだった。しかし「日本茶が遠いヨーロッパで、その名を馳せるな

どと、思いもよらなかった。で済まされる事態ではない。現在ヨーロッパでは「日本茶ブーム」が沸き起こっている。日本茶に含まれるビタミンCや各種ミネラル、お茶殻には食物繊維や水に溶けないビタミンA、Eが残っており、飲用ばかりでなく食べても身体によいことがわかってきている。あの心をくつろがせてくれる味わいは、リラクゼーションの役割も果たしてくれるのだ。生活様式の変化と共に、あまり口にされなくなりつつある日本茶だが、もう一度見直してみてもどうだろうか。ごく身近にある宝物を見逃す術はない。

協力：静岡茶商工業協同組合  
日本茶輸出組合

トスカーナ州の春の一大イベントである「椿祭り」はヨーロッパ中から大勢の人々が訪れる。今年は3/8〜3/23まで開催された。



静岡茶商工業協同組合と日本茶輸出組合による湯茶接待に、注目が集まった。独特の味わい、薫りはヨーロッパの人々にも好評。キャンティの赤ワイン、エクストラバージンオリーブオイルで知られるトスカーナ地方で、お茶が認知される日も近い。



自慢の椿に囲まれたグイド・カトリカ氏。日本の花としてヨーロッパに渡った椿（学名カメリアジャポニカ）をこよなく愛するグイド氏のピッラは、まさに椿屋敷。椿栽培は園芸を趣味とする人々のなかでも、限られたハイクラスの人にしか実現できない分野。お茶を栽培し始めたのは、椿への愛着からだったのだ。



(社)静岡県茶手揉み保存会による手揉み茶の実演会。グイド・カトリカ氏と谷本宏太郎氏も参加。コレクションの一つであったお茶が飲み物になるとは……。

ヨーロッパ唯一の露地栽培の茶園で行われたイベントは、最近の健康・自然ブームの影響もあり、大盛況であった。お茶と椿のコントラストが美しい。